

旧三上郡三十三か所霊場⑬ ふるさとの巡礼地を訪ねて

総集編（結願を終えて）

その本に出会ったのは、たまたまっていた古新聞や雑誌を集積場に持ち込んだときだった。紐でくわされた本の束の上に、古びたわさび色の表紙の冊子があった。それが「旧三上郡三十三か所探訪記」（以下、探訪記と略称）である。手書きの文字をそのまま使って製版されていた。

一九八三年に出された本で、編纂したのは地元の郷土史家のグループで「ふるさと研究会」。そのメンバーの一人が上田輝馬氏で、わたしが経営している古本屋「どら書房」の顧客であったことも、縁というものを意識した。

旧三上郡とは、庄原市（合併する前の旧庄原市）が誕生するまでの庄原町、敷信村、本田村、高村を一括した藩政時代の郡名である。三十三か

所霊場巡りの観音信仰は、「観音経」における、観音菩薩が娑婆世界を遊行し、そのときに三十三種類の姿に変化して人々を救済すると説かれていることに由来する。

西国三十三か所霊場が有名だが、観音信仰が盛んだった江戸時代は、簡単には旅行ができない世相だった。土地を離れるには許可がいるし、交通手段も乏しいので多額の費用と日時が必要。庶民には高嶺の花で、どうしても巡拝したい、観音様のご利益に浴したいという悲願が、全国各地に代用の巡礼地を誕生させた。旧三上郡三十三か所霊場もその一つである。

（昔の霊場は、現在は怎么样了のいるのだろうか？）

素朴な疑問を抱いた。（現状を取材してレポートしたら、企画としてもおもしろいのではないか）

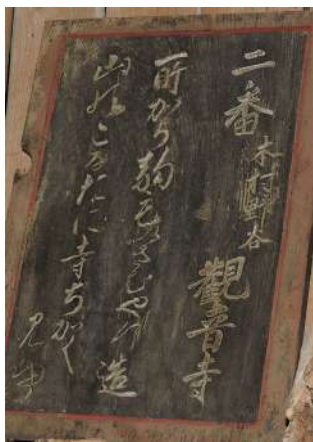
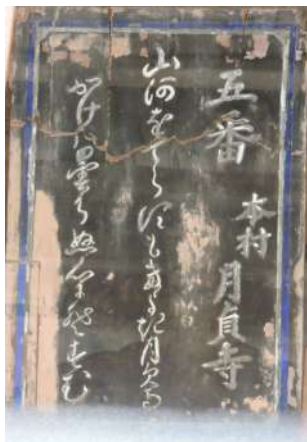
かくして「ふるさとの巡礼地を訪ねて」が、二〇一八年

十月号からスタートした。上田輝馬氏の協力を得たのも大きかった。実際に現地を案内してもらったり、地元の関係者の連絡先をアドバイスしてもらった。

三十七年前に探訪記が出された時点で、御詠歌の額面を見つけることができなかった霊場が八か所ある。一番・龍福寺（小用）、七番・時貞寺（上谷）、十番・東光坊（春田）、十八番・西光寺（新庄）、十九番・萬福寺（是松）、二十四番・大御堂（高）、三十一番・庄源寺（庄原）、三十二番・西明寺（庄原）。このうち、七番・時貞寺、十番・東光坊、三十一番・庄源寺は建物も残っていない。

今回、霊場の札所巡りをし、一番札所の龍福寺の額面を確認することができた。これは、現住職が子供の頃、床に置かれた額面を発見して、当時の住職である父親に報告、それで本堂入口の上部に掲げられたという経緯がある。

反対に、探訪記で調べた当時は存在した額面が、今回は確認することができなかったのが十六番札所、永専寺。探訪記では、松林の中で倒壊した建物跡から額面を発見、近くにある浄土真宗の西林坊に保管を依頼した経緯が記され



ている。しかし、今回、西林坊に問い合わせても所在は不明、額面の事を知っている人もいなかった。探訪記で見つかったときもかなり破損した状態だったので、仕方のないことなのかもしれない。

今回、額面で新たに見つかったものが一つ、探訪記では見つかったがそれを確認できなかったものが一つ。全部で二十五か所の札所の額面を確認、写真に記録することができた。ただし、掲載号のスペースの都合で、額面の画像を紹介できなかつた。最後に掲載することにする。本誌は、インターネットでも公開しているので、画像を拡大して見る



ことも可能である。資料的価値を考慮して判断した。



今回の取材は車で細切れに回ったが、札所をのんびり歩いて巡拝したいと何度も思われる風景にたくさん出会えることができた。

可能であれば、車道ではなく、なるべく当時の巡礼路を忠実に辿って、静かな旧街道を歩きたい。とても一日では回れないだろうから、所在地の近辺で休息やトイレ、あるいは泊まれる場所があればいいのだが……。

取材中に何度か目にした地域の集会場を利用してもらえれば、と考えた。あるいは、山中で傷んでいる空き家を少し手直しする。寺院を訪問したときは、座禅体験をさせてもらったり、和尚さんに法話を聞かせてもらうのも良さそうだ。宗教的に抵抗のある人は、霊場巡りではなく、ウォーキングや散策道として利用してもいい。
身近にそういう場所があれば嬉しいと、地元民の一人として素直にそう思う。

【新刊紹介】

二人の芸術家を夫にした女性

「築地人形」 青木笙子（河出書房新社）

倉田百三は彼女のことを「お絹さん」と呼んだ。病院の看護婦として病床の倉田の世話をしていた神田晴子のことだ。絹は一見冷たいが、着用すると暖かい。晴子は後の倉田百三夫人である。

大ベストセラー「出家とその弟子」で文壇の寵児となった倉田百三だが、女性問題で晴子は離縁され、やがて東京の倉田の家を出ることになる。そして、高山徳右衛門と結婚して高山晴子となる。高山は、後に東映時代劇の悪役として活躍した個性俳優、薄田（すきだ）研二である。倉田作品の愛読



者だった高山は、晴子に深く同情し、それが激しい恋愛に変わっていった。

前半部分は倉田百三との関係を中心に、後半部分は薄田研二との関係を中心に書かれている。築地人形とは、「食うや食わずの若い新劇俳優のために、高山晴子が考案した舞台人形」、それを売って生計の足しにしたのだ。その人形は後に展覧会に出品され、高い評価を受けるようになる。

帯の言葉を記しておく。「美と真に憑かれた芸術家・倉田百三、薄田研二、二人の男を夫とした高山晴子の劇的生涯を、濃密な新劇創成期を背景に描く書下ろし」。

序章では、著者が庄原の倉田百三文学館を訪ねる場面が描かれている。それがちょうど九日で、「庄原九日市」のことも書かれている。膨大な参考文献から丹念に資料を考察したノンフィクションの佳作である。

定価は二千五百円（税別）。

山代巴『荷車の歌』

——農村婦人の叫びを代弁

広島県府中市に生まれた山城巴が、三次市の山中の農婦の過酷な生活モデルを描いた『荷車の歌』（1956年刊、筑摩書房・他）は、映画化されて全国に広がりました。映画は、全国農協婦人部の10円カンパで4年後に公開されました。「もはや戦後ではない」といわれながら、日本経済を下支えした農村婦人の過酷な現状が、人々の強い共感を呼び、作品が見直されたのでした。

小説は、76歳の「セキ」の回想というかたちで展開します。郵便配達夫の「茂市」と駆け落ち同然で結ばれ、広島山奥、赤名峠から三次までの「五里」（20キロ）を荷車を引いて往復する過酷な暮らしが描かれます。その幼少期は日清・日露戦争にさかのぼり、織工、米騒動、昭和不況、大東亜戦争、農地解放が背景として登場します。

明治の後期、茂市は貯めた金で隣村の30戸足らずのムラに「十坪」のあばら屋を買い、荷車引きを始めます。セキは真夜中の12時から支度をし、二人は車2台に荷を積み、三

次に向かい、昼前に引き返し、帰り着く頃には日が暮れます。女手ひとつで茂市を育てた姑は、セキが手を

何ひとつ意見が出来ません。今で言うマザコンです。

二人は、身を粉にして働きながら子を産み、きかん気の強かった娘は、職工として稼ぎ頭になり、家に金を入れます。セキは寝込んだ姑にも尽くしますが、姑は「裏をかえされる」

また読んでみたい本④9

青年たちに

音谷 健郎



【筑摩書房版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第49回は、山代巴の『荷車の歌』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

その茂市は1950年、田んぼで倒れ、白血病の症状で亡くなります。

世の中は、デモクラシーや岩戸景気です。浮かれています。戦前に戻ったような男尊女卑の農村社会をなぜ執拗に再現したのでしょうか。それは、農村ではまだ婦人が物言えない、封建的な実態があったからです。

山代巴は、治安維持法違反で5年余ほど拘束され、出獄した敗戦直後の体験からこう言っています。

「当時の民主化運動のハッタリの横行する中で、とりのこされたような淋しいものとなりました。この体験を通じて私は初めて、ほんとうのことや思うことのない、貧しい農民の心を、自分の心とすることが出来たように思います」

デモクラシーからほど遠い農村の婦人に、「二途な、焰のようなもの」を見出したのだと、私は思います。

山城巴にはこの5年後に完結した長編小説『囚われの女たち』（全10巻）

があります。戦前の物言おうとする工場労働者を襲う治安維持法の残忍さを、自分の体験として描いています。こちらは、人権をめざした、より直截的な証言でもあります。

次回は、開高健『パニック』を取りあげます。

休めることを嫌い、常に監視しています。次々と生まれる女の子を、「ク

ソ（糞）ビク」と呼び、嫌います。それどころか、子どもが口答えすると木に縛り折檻します。ビクは女の子の地方名です。

茂市は、この母親に頭が上がりず、

（復讐すること）と警戒し、出された食事の毒味を求めるところでした。が、最期はセキに感謝します。子でくさんの二人は「格違い」と羨望される大家を建てます。ゆとりの出来た茂市は妾をつくり、家事の手伝いとして家に引き入れます……。

「山の歳時記・春」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

カタクリ 万葉の歌人も愛でた里山の花

物部(もののふ)の八十少女(やそおとめ)らが汲みまがふ
寺井の上の 堅香子(かたかご)の花

多くの少女たちが入り乱れて水を汲んでいる。その寺の井戸のほとりに咲いているカタクリの花はなんと美しく、可憐なものよ、という意味の歌です。

この歌は万葉集巻(まき)十九(四一四三)にのせられているカタクリを詠んだものです。

春早くまだ林の中は緑が乏しい中で、縁の大きな葉をひろげ、美しく目立つ桃色の大きな花をつけているカタクリ。しかも、その



カタクリが林床を広くおおうように群生している姿は、長い冬から解放され、喜々としてたわむれながら水を汲む多くの美しい少女にもまして美しく、万葉の昔の歌人の心をとらえてはなさないものがあつたでしょう。カタクリの花の群落を目にした人は誰も万葉の歌人

と同じ思いがこみ上げてくることと申します。

万葉の昔は、寺井の上というように、どこでも多くのカタクリの花が咲きほこり、人びとの目に映じていたことでしょう。しかし、それからおよそ千二百年を経た今、県北ではカタクリの見られるところは、ごく限られたところとなり、幻の花となろうとしていることはとても残念なことです。

片栗粉、これはカタクリの球根からとれた粉ということからそう呼んでいるのです。でも、カタクリが幻となろうとしている今、ジャガイモのでんぷんを精製して作り、片栗粉という呼び名を残しているのです。カタクリの球根から作った「片栗粉」

とジャガイモから作っている今の「片栗粉」とあまりちがいはないかも知れませんが、美しい花をつけるカタクリの球根から作った「片栗粉」へ軍配をあげたくなるのが人情かも知れません。

カタクリは林に春を告げる花です。林をかえりみることなく、荒れるにまかせているこの頃、林の荒廃はカタクリの花の衰微に拍車をかけているようです。もし林でカタクリを見つれることができなくなる日がきたとしたら、林は死をむかえたにひとしいのです。春、カタクリの花を訪ねながら、私たちに一番身近な自然、里山の林への思いを深めようではありませんか。

ニシキキンカメムシ

今年の啓蟄(けいちつ)は三月五日。

春を謳歌する極彩色の虫

このころから、冬ごもりしていた虫

が姿を現し、活動を始めるという。しかし、「彼岸過ぎても七雪」といわれている広島山々では、四月に入つてようやく、虫たちが動き出す。前年の秋、四度目の脱皮を済ませ、五齡幼虫となつて冬眠していたニシキキンカメムシ。四月に入つて眠りから覚めると、新芽が萌えたつアケビなどの若い蔓に集まり、盛んに汁を吸い始める。やがて、汁を十分吸つて成長すると、最後の脱皮を済ませて、美麗な新成虫の誕生となる。

ポエキロコリス・スプレンディ



ドウルス。「すばらしい多色のカメムシ」という意味だが、学名より和名の方が、この虫の鮮やかさを的確にとらえている。当を得て妙である。

異臭を放つカメムシは嫌われ者である。広島県では「はつとうじ」と呼ばれ、敬遠されている。中でも最も異臭の強いクサギカメムシは家屋に侵入して越冬もするので、林を切り開いて造成された団地などの場合、キイロスズメバチと共に「不快昆虫」として駆除されている。ニシキキンカメムシの派手な色は警戒色の役割を果たしているらしく、異臭は弱い。カメムシの異臭は身を守る手段。不快昆虫として駆除するのは人間の身勝手ともいえる。

ニシキキンカメムシの生息地は全国で二十か所にも満たない。中国地方では帝釈峡と岡山阿哲峡。どうしてこの石灰岩地帯に限って生息しているのかはわからない。ニシキキンカメムシの新成虫が卵を産み、幼虫がふ化するころ、峡谷は初夏を迎える。

(写真はいずれも小川光昭氏撮影)

老いの雑記帳 ②6

最後の時

木々の新緑が太陽の光を受けて目に眩しい。一年に一番美しい季節だ。春は人の心をウキウキさせる。そう思いながら長い人生を送ってきた。

しかし、今年の春は例年とは違った感覚で庭の木々を見つめている。風に揺れる楓の若葉が何故か侘しいのだ。あと四日で八十三歳になる身の哀れさと較べるからなのだろうか。それとも、希望の波が寄せない老境の域に達したからなのか。

人は誰でもいつか死を迎える。死を目前にした時、自分は満足な一生だったのかと誰もが考え

ると思う。「我が人生に悔い無し」と納得して往生する人は幸せである。「あれをして置けばよかった」「あそこへ行つて置けばよかった」などと後悔する人もあるだろう。そうした人の死は悲しいものだ。

知人に借りたアメリカ映画のDVD「最高の人生の見つけ方」というのを見た。ジャック・ニコルソンとモーガン・フリーマン主演の映画だった。病院で同室の二人が共に癌で余命一年と告知された。二人は最後の一年を世界旅行に賭けた。パリ、エジプト、インド、ホンコン、万里の長城……と、贅を尽くした二人旅に出た。でも最後は夫々我が家に戻り、家族に看取られ平穏な死を遂げた。

表情に満足感が溢れていた。最後の一年が彼らの一生を凝縮していたのだった。「人間、死ぬまでは生きている」と、教えてくれた感動的な映画だった。

「続・思いのままに〜我が心の雑記帳〜」(鈴木澄夫著)より

幼いと言っているほどの童顔の少女が、大人びた表情で見つめている。そのコントラストが、妖しい魅力を醸し出している。頬に「KASUMI」のロゴ。

CDを取り出して、コンポのトリーナーにセットする。いつもはジャズしか流していない。ジャズがとりわけ好きなわけではなかった。本を読むのに邪魔にならない音楽を選んでいたら、結局、ジャズだけが残った。

Jポップスの軽快な前奏が響いて、やがて伸びやかな歌声が聞こえてきた。

「おれの教え子なんだ」

中学で体育教師をしている男が、そのCDを持ち込んだ。中学時代と変らずに坊主頭だが、さすがに白髪が目立つようになった。

「恩師へのプレゼント……、じゃあなさそうだな」

半透明の買い物袋には、同じCDが何枚も入っている。

「罪ほろぼし……、かな」

彼女ははじめにあっていったんだ、と告白した。

「おまえ、走るの遅かったよな」

「陸上部だったおまえに言われたくはないよ」

「そうなんだ。軽く流してもおまえのように遅くは走れない」

「自慢してるのか？」

「足の遅いやつの気持が理解できない。それと同じで、彼女のことを理解できなかった。彼女は人の気持がわからないんだ。場の雰囲気があるで読めない。話を合わせるべきでない、自分の興味のあることだけを一方的にしゃべる。正直だから、相手の欠点をそのまま口にしてしまう……」

かすみ草

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ④③

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

ら、相手の欠点をそのまま口にしてしまう……」

自閉症スペクトラム障害、店に持ち込まれた古本で読んだことがある。

以前は、KYとか、アスペルガー症候群とか言われていた。発達障害の一つである。

「副担任だったおれは、足に障害がある子供に、人並みのタイムで走ることを強要していたんだと思う。彼女

が逃げ出すように転校した時は、厄介払いができたどホッとしたよ」

寂しそうに笑った。

「じゃ、三千円な」

「おいおい、金を取るのかよ」

「こんな田舎からメジャーデビューの歌手が出たんだぞ。応援するのは当たり前だろ」

金を筆取り取られなければ、聞いてみようという気も起らなかったら

「おじさんにはキラキラしすぎて、眩しすぎる」

彼女が首を傾げた。

「愛だの夢だの希望だのと安売りされても、そんなものはなかなか手に入らないという事がわかるぐらいには歳を取ってるからね」

偏屈なことを言っているなどという自覚はある。

「わたしも……、そう思います」

サンングラスから涙が頬を伝った。

「おじさんは、正直な方ですね」

サンングラスとマスクをはぎ取った。CDジャケットの顔が現れた。

「あたし……、人を殺しました。警察に連絡してください……」

差し出した両手の掌は、明らかに血痕で汚れていた。

小柄な若い女性であることはわかった。

小春日和だったので、石油ストー

丘の上の山桜は満開だった。空は青く澄んでいる。



「瞑（ねむ）るにはいい場所だな」

おれは頷いた。

「ありがたいな」

柄でもない言葉に、驚いて顔を見
た。

「声をかけてもらって、感謝してい
る」

おれは内心、かぶりを振った。ふ
たりで来るのが重荷だっただけなの
だ。

彼女が手にした花束を、まだ新し
い墓前に供えた。かすみ草、小さな

可憐な花を咲かせている。

陸上の走り幅跳びの選手だった山
城あかねは、活発な性格で、クラス
でも中心人物だったという。そして、
いじめでも中心にいた……。

陸上の有望選手として、特待生で
東京の大学に迎えられたが、度重な
る足の故障で選手生活を断念した。
故郷に帰って、市役所の臨時職員と
して働いていたが、農家のひとり娘
の彼女には、婿取りの結婚話が進ん
でいた。

「あいつは、身体も心も男だったか
らな」

陸上部の顧問だったので、思い当
たることはあるらしい。

「あかねちゃんが最初に声をかけて
くれたんです。いい名前だね。あた
し、かすみ草が大好きなんだよ」

早川香澄は転校生だった。両親が
離婚して、父親の実家の祖父母に預
けられた。

突然、山城あかねから手紙が届い
た。中学時代のことを謝罪する内容
だったという。最後に、自殺をほの
めかすような言葉が書いてあって、
心配になって手紙の住所を訪ねたの
だ。

浴室で手首を切って死んでいるあ
かねを発見して、どうしていいかわ

からなくなつた。自分に責任がある
のだと思つた。彼女を死に追いやつ
たのは自分だと思つた。あかねのこ
とを恨んでいたから、こんなことにな
つたのだと自分を責めた。

外に飛び出して、町中をさまよつ
ているときに、自分の歌声が聞こえ
てきたのだ。

「あなたが好きだと言ってくれたか
すみ草……」

最初は、鼻歌のような小さな声
だった。

「一生懸命、咲きましよう。あなた
のために咲きましよう」

涙を拭いて、声を張り上げた。

「恋人じゃなくてもいいの。そんな
高望みはしないから」

ハイトーンの心に沁み入るような
澄んだ歌声だった。

「友達じゃなくてもいいの。そんな
贅沢は言わないから」

しゃくりあげる声に隣を見ると、
番犬のような顔が哭いている。

「小さな場所でもいいの。あなたのそ
ばに居させてほしい……」

空を見上げた。

（まいったな。母親が死んだときだつ
て、泣かなかつたんだぞ）
青が滲んで水色になった。

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。
無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやって
います。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL：090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「卑弥呼の木像が出た！」

神門酔生 著 晩聲社

こうどすいせいと読む。邪馬台国はどこにあったか？九州説と畿内大和説が有名だが、この本では越前こそ邪馬台国であると断言している。故郷鼻眞の希望的観測かと思って読み進めたが、なかなか説得力がある。対馬海流に乗って、戦乱に破れたおびただしい数の中国人貴族がやってきた場所なのだ。

福井県武生市の名家の抹消であり、「ザ・ラスト・サムライ」を自称している。「特別の来客がなければ、ただ一枚所有のネルの寝間着を着たきり、もう三五年間ほど風呂に入っていない。『あきれ果てるほど怠惰、ものぐさ』なのが理由のすべて」、著者も曲者である。三宅一志氏構成の聞き語り。



「沢木興道聞き書き」

酒井得元 著 講談社学術文庫

子供の頃に両親を亡くして、放蕩三昧の養父に引き取られた。このままでは自分も墮落すると、大阪の養家から4日間歩き通して、福井の永平寺の門を叩いた。曲がったことが大嫌いのきかん坊は、修行の先々で騒動を引き起こす。日露戦争では軍曹として大活躍。波乱万丈、まるで孫悟空の活劇を読むようだ。不心得者には、舌鋒鋭く容赦はない。



「辛抱するということには、なにか目的がある。そして、なにか目的にする下心の『つもり』があると、その行為が不純になる」。仏法狂と陰口されるほど修行に打ち込み、寺なし、金なし、女房なしの求道の生涯を貫いた。人生指南の言葉の宝物庫である。

「性悪猫」

やまだ紫 著 ちくま文庫

うちの飼い猫がまだ野良だった頃、あちこちで媚を売って餌をもらっていた。何度も子猫を産んで、次の子供を孕んだら育児放棄、アバズレと表現したら、あんまりだと誰かに抗議された。その遅しさに半ば敬服しての呼称……、今回の「性悪」もそんな感じだろうか。

ガロの作家らしい小市民的な世界を猫に託して描いている。つげ義春につながる漫画の純文学作品集。最後の作品で、母猫が子猫たちにいった言葉がとりわけ印象に残った。「よく育とう」一決意すれば育つよ。わたしもそうして自分を育てたの。親任せ、人任せではなく、自分の意志で育つのだ。何度でも読みたくなる短編集。



どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくろ俳壇&歌壇

永久に四月一日西東忌

初蛙うつつや四階病床に

文を焼く小煙蒲公英たんぽぽいぬめぐり

ふるさとの祖母の遺せし雛飾る

侘助の紅をさしたり名残雪

耳遠き二人の話うららけし

飄々と春風吹いて昌平忌

子供らの通学の声消へた道

河津櫻はひそやかに咲く

近藤 昌平

竹地 恵美

富久 光

片岡 正人

隆 愚

大槇 三代子

赤川 冬人

松岡 初枝

※参加を歓迎します。

投稿&寄稿

「俳句三昧」

赤川 仁洋

近藤昌平さんが亡くなった。昨年 ような病状ではなさそうだと再会を来より誤嚥性肺炎をこじらせて入院 楽しみにしていたら、突然の訃報で院を繰り返していたが、今度は胆嚢 炎を起こして入院、生命にかかわる 享年は九十一歳。



爆心地炎昼のフリーマーケット

広島の間人が詠むと「爆心地」は原爆の投下された場所であり、炎という文字に灼熱の地獄絵図が思い浮かぶ。一転して、夏の昼下がりの、のんびりしたフリーマーケットの情景、平和の中の自由を謳歌する人々。この強烈なコントラストが、平和の大切さを体感させてくれる。後世に残る句だと、わたしは確信している。

同窓会着ぶくれしたるジジとババ

こうした日常を、さらさらと写生のように詠む達人でもあった。うちの店を「どら猫書房」と呼んで、自撮りの野良猫の写真をたくさん寄贈してくれた。

今回のどらくろ俳壇に載せた句は、近藤さんが「西東三鬼賞」に応募しようとしていた句。天邪鬼の三鬼にはエイプリルフールがお似合い？ それに「永久に」をつけたところが近藤流の諧謔の妙だろう。

三月二十二日が永久に昌平忌になってしまったが、大本教の信者である近藤さんは、死後の靈魂の存在を信じていた。霊界から名句のアイデアを送信してくれないだろうか。

郷土の本棚⑪ (文責・赤川仁洋)

総合版「比和の民俗と歴史」

庄原市比和自治振興区

「比和の民俗と歴史」という12ページのA4判の小冊子が、比和町郷土史研究会の会報として発行されている。

平成12年7月に第1号が出ているので、もう20年も継続していることになる。この度、比和自治振興区より、第1号から平成31年2月に発行された35号までを復刻、1冊の本にまとめた総合版が作成された。

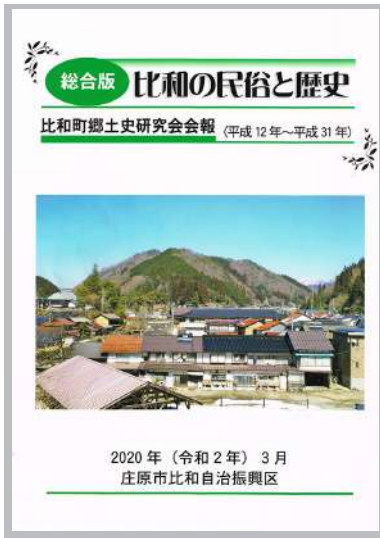
過去の会報が経年とともに散逸して、全号揃いはわずか2セットしか残っていないという危機感もあったようだ。立派な本になって全体の目

次が付くと、興味ある項目の拾い読みができてありがたい。いくつか紹介しよう。

「結婚式場に運び込む石仏」、とついできた嫁さんの「尻が座る」、何時までも離縁にならないようにと願って生まれた風習だ。戦後の4、5年は復員による結婚ラッシュでお地藏さんも大忙し、大安の同日同夜に比和で3組の結婚式が挙行されたことも度々あったそうだ。この微笑ましい風習も、結婚式が会館や会場で行われるようになってから廃れてしまったという。

「比和の俗信と迷信」の欄には、なかなかハードな言い伝えが載っている。「田植の夢を見ると運が悪い」、「魚(鯉)を捕まえた夢を見ると人が死ぬ」、「子供が産まれた夢を見ると人が死ぬ」、「一月に人が死ぬとその部落は一年中人が死ぬ」。反対にへビの夢は縁起が良いようだ。

兼丸昌治さんの「里芋の話(子芋、



④



③



②



①

ずいき芋)には、いかに里芋が重要な作物であったかが書かれている。芋はもちろん、茎(ずいき)も乾物にしたり漬物にしたりして貴重な食料になる。長いずいきは皮を取らずに乾かし、三つ組に編み木負子の負い紐にしたりする。

芋正月というはじめて里芋を食べる日がある。高野地区においては、この日だけは里芋を作っていない者が、無断で他人の畑から里芋を盗んでよいという習慣があったという。このめでたい日だけは、金持ちも貧乏人も同じものを食べようという発想で、盗む方も遠慮して感謝しながら盗むので、大きな被害にはならなかった。

写真も充実していて、見ているだけで楽しい。「ばんばら」と「山づくし」という比和伝統の盆踊りが分解写真で紹介されている。ほろ酔い気分が輪の中に入って踊れたら最高ではないか。

非売品だが、いくら在庫があるので、希望者には二千円で販売している。

申込先は庄原市比和自治振興区。

☎0824・85・2600

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

保護犬の里親募集

- ・推定7歳ぐらいの雑種の女の子。茶色、タレ耳、半長毛の中型犬です。
- ・避妊手術、8種混合ワクチン、済んでいます。
- ・フィラリア陽性ですが、進行はしていません。予防薬を用いた治療中で、1～3年で陰性になるそうです。
- ・乳腺種、足の表皮に肥満細胞腫がありましたが、手術で切除。組織検査の結果はとくに問題はなく、今後は経過観察で大丈夫だと言われています。
- ・ビビリなところはありますが、おとなしくて吠えたり咬んだりすることはありません。
- ・辛い思いをした犬なので、家族の一員として大切にしたいだけの方を希望します。

《保護の経緯》

町中をトボトボ歩いているのをA子さんが見つけ、ガリガリに痩せていたので、このままでは危険だと判断して保護。首輪はしていませんでした。

警察と動物愛護センターで確認しましたが、届けは出ていないそうです。

衰弱が激しく、相当に長い期間、放浪していたのかもしれない。今は食欲旺盛で、体力も回復しています。

《連絡先》

入船 ☎090-7137-6892

Email:kirifune@docomo.ne.jp



編集後記

◇元気が出ませんね。世界規模のパンデミックで、不安が広がっています。こんなときに、のんびりミニコミ誌の原稿なんか書いていいのかわ...、東日本大震災のときのことを思い出します。無力感を噛みしめつつ、自分のするべき責務をこなしていくしかありません。

◇先月号「山里の唄」の紹介で、この県北の地と雰囲気がよく似ていると書きましたが、毛利氏が長州に移封されたときに、山内首藤家の家臣も山口の地に移っています。郷土史家の方にそのことを指摘され、なるほどと思いました。

◇五年目に入りますがよろしくお願ひします。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail:touzin@nifty.com

年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183

協賛：九日市愛好会

第 231 回

しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 2 年 4 月 9 日 (木) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
休 館

★楽笑座で「まかない食堂」中 止

★楽笑座で「うた声喫茶」中 止

★どら書房 →休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休みです。

但し、九日市の日は営業します。

★きくや →総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍 →九日市スペシャルで餃子 200 円！

出店配置図



出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

